

桜蔭俳話会 四月句会(第三〇四回)

鎌倉吟行 (寿福寺・英勝寺他) 句会場・鎌倉生涯学習センター

平成二十四年四月二十二日(日)

【秀句鑑賞】

うぐひすの声惜しみなく立子の碑 友子

寿福寺にある星野立子の墓所の句碑には、「命惜しむ」の感慨を披瀝した雛納めの一句が刻まれている。心の奥にまで染み込むように鳴いている鶯。その声の只中にいる作者は、この句に深く共感し、「声惜しみなく」のフレーズを天啓のように賜ったのであろう。格調の高い、吟行なればこそその佳句である。

【自句自解】

行く春や小町通りの守り猫 守

雨との天気予報の所為かいつもより小町通りの人出は少なめであったが、通りに面した民家の前に毛並みが良い大柄な一匹の猫が座っていた。飼猫と思いきその猫は頭を撫でられても嫌がったり、反対に甘えたりすることもなく、小町通りの守り神のように威厳があり、泰然自若としていた。出会い頭に瞬間的に得た一句である。

【秀句鑑賞】

鶯の統べぬし鎌倉五山かな 明美

鎌倉五山の一つである寿福寺に入る前から鶯の声はそこかしこに聴こえた。晩春ともなれば鶯の鳴き声は正調そのものであり、五体に沁み入るようであった。一山の鶯の鳴き声から他の四山にも同様に鳴く鶯の存在を連想し、「鎌倉五山」として鎌倉を全景的に捉えたものである。論理的な厳密さから言えば、「五山を統べる」と断言できるのは、五山全部を巡り、鶯の鳴き声を五山全てで確認してからのことであろうが、これはこれで文学的修辭としては許されるのではないかと思う。厳格な体験主義よりも文学的な想像力、連想力を大事にしたときもある。

【秀句鑑賞】

十字架のまじる墓域や花は葉に 明美

キリスト教を邪宗として排斥した江戸時代から見れば、十字架の墓が何気なく混在している墓所の風景は、まさに驚天動地のことであろう。「花は葉に」という季語を配置することによって、時の移ろいによる為政者や人心の変化が巧まず表出されている。

【秀句鑑賞】

花冷の山門閉ざす葵紋

秀一

徳川幕府の手厚い庇護のもとに格式を誇った英勝寺の山門はいつも閉じられている。一定以上の身分を有しない者は、脇の狭い通用門からの出入りを許されるだけであった。意図してか偶然かは知らないが、吟行で訪れたその日も通用門が開かれていただけであった。山門には身分低い者を睥睨するように権力の象徴として葵の御紋が掲げられていた。この山門の前に佇めば、花冷が一層身に沁みるようだった。文化(文化財)の保護ということは、それにまつわる封建的思潮をも墨守するということか。

【秀句鑑賞】

春の墓ポンプを強くこいでみる

真三

ポンプは閥伽桶に水を汲み取るための井戸の手漕ぎポンプである。この句の眼目は「強くこぐ」に対して「春の墓」と置いたことにある。一見すると無造作に「春の墓」と置いたように思えるが、夏の墓、秋の墓、冬の墓と置き換えて見れば分かるように、「春の墓」は揺るぎないものである。春光のあふれる中に井戸のポンプを強くこいだのである。

【自句自解】

花は葉に川喜多映画記念館

守

いつときの映画隆盛期に多感な少年時代を過ごした者にとって、現在の低迷期にある映画の状況は嘆かわしいの一語に尽きる。まさに満開の花は散り去ってしまったのである。この記念館の入り口に掲示されている往年の名画ポスターが目に見鮮やかなだけに、今の映画人の奮起を望むばかりである。

【秀句鑑賞】

春筍の世を怖れずにそこかしこ

秀一

原木栽培の椎茸と同様に筍は警戒されている。筍は、放射性物質が堆積し浸透している土壌から出てくるからである。人間世界では放射能汚染に戦々兢兢としているが、筍はそんなことは知らずにどんどん出て来る。「世を怖れずに」のフレーズがシュールである。人類は、「核分裂は制御可能」と信じて原発を推進しその恩恵を享受していたのであるが、地震及び津波という天災と少なからぬ人災的要因によって、今の厳しい状況を招いた。怖れを忘れると、取り返しのない事態を招くということか。

【秀句鑑賞】

納骨の三人をりし若葉萌ゆ

ヤエ子

若葉と納骨が巧まずして生と死の絶妙な対比になっている。また、納骨に集まった縁者が三人であると断定することによって、故人を取り巻く人間関係の有り様を想起させる。偶然とは言え、三人という数の特定が効いている。

【秀句鑑賞】

春光や窓より拝す三尊像

友子

参観は質素な造りの堂の小窓を開けて行なうようになっていた。薄闇の堂中央には三尊像が鎮座しており、何かの法事の後ののか、床にはパイプ椅子が並べられていた。小窓から差し込む春光の中に三尊像の慈顔が浮かび上がった。全面開放によって光りがあふれた状況ではなく、限定された開口からの弱き光りは、視点を集中させることになり、参観を逆に効果的にするものであった。

【秀句鑑賞】

花冷や矢倉に遺る金槐集

貞勝

実朝の和歌を愛唱する者が矢倉の中の実朝の墓に参拝した時、矢倉の奥に文庫版の金槐集を置いていったのであろうか。武家の統領として三代將軍に祭り上げられるよりも、優れた歌人として精彩を放った実朝の魂を慰撫するように、古ぼけた一冊の金槐集が遺されていたのである。

「事務局より」

◎次回の吟行は、十月の予定です。ご希望の場所がありましたらご連絡ください。

◎通信句会を実施します。同封のはがきで作品をお送りください。

・締切り 五月五日（土）

・句数 春に属する季語を用いた三句